

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年7月1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局 生命科学研究所

職名 教授

氏名 原田 浩

助成の種類	令和6年度・国際会議開催助成		
国際会議名	京都大学・国立台湾大学・筑波大学合同 国際分子細胞生物学ミニシンポジウム		
開催期間	2024年6月8日～2024年6月8日		
開催場所	京都大学百周年時計台記念館・国際交流国際交流ホールIII		
参加者	総数 107	内訳 国内:教員19名、学生76名 海外:教員5名、学生7名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	2,466,360 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学大学院生命科学研究所部局長裁量経費 JSPS研究拠点形成事業・京大原田拠点	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費	116,600	116,600
	会場設営費	557,700	557,700
	印刷製本費	171,600	171,600
	消耗品費	95,232	95,232
	その他交流学习会費	580,418	58,868
旅費	944,810	0	
合計	2,466,360	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本事業の実施にあたり、貴財団の助成いただけたことを深く感謝いたします。本助成は、年度最初期に募集開始から採択までを非常に短期間にスムーズに進めてくださることで、本事業のような年度初期のイベントにも十分に対応することができる点が大変素晴らしいと感じました。このようにスムーズなご対応をいただくことは、準備に手間の多い国際会議の開催にとって非常に助けになるものでした。重ねてお礼申し上げます。		

成果の概要／原田浩

令和6年6月8日、京都大学百周年時計台記念館・国際交流国際交流ホールIIIにおいて、京都大学・国立台湾大学・筑波大学合同 国際分子細胞生物学ミニシンポジウム（以下、「本シンポジウム」と略記）を開催しました。本シンポジウムは、2005年より生命科学系の部局間で協同して英語遠隔講義を提供している三大学が、相互に訪問してシンポジウム形式で学術交流を行っているもので、今年で21年目にあたります。国立台湾大学からは教員5名と学生7名、筑波大学からは教員3名と学生5名の、計20名が来訪しました。訪問期間は6月6日から9日の4日間であり、その間には合同英語講義を行い、また歓迎会やツアーを開催するなどして人的・文化的交流を行いました。また教員間では、国際交流や連携教育に関する打ち合わせや、国際交流事業の現状や展望を共有して、今後の交流の具体的なスケジュールを検討するとともに、将来のより密な連携に向けて協力を深めることを確認しました。

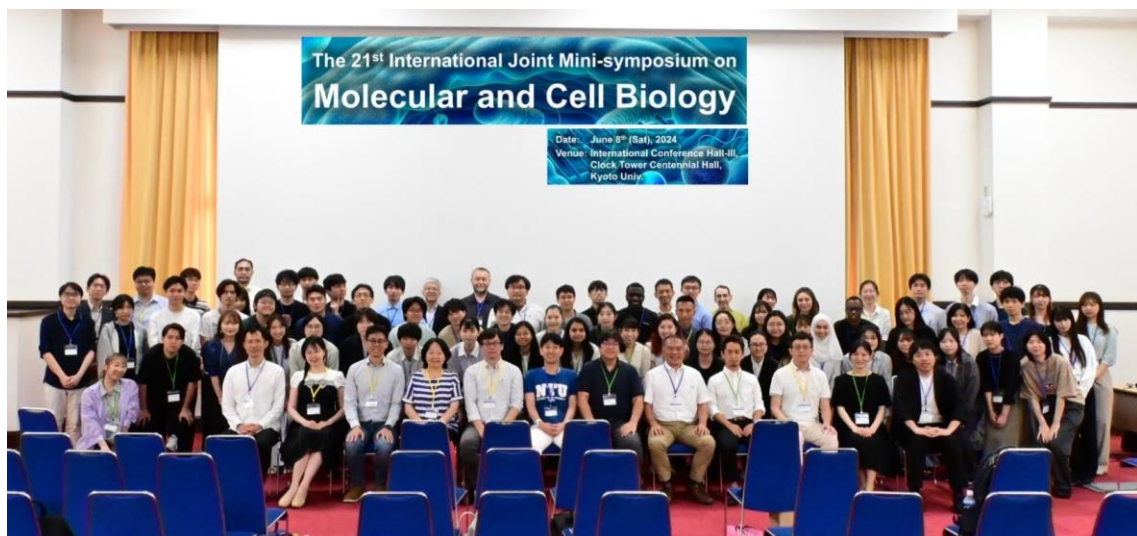
本シンポジウムでは、教員による3題の招待講演と、学生による口頭発表9題、ポスター発表19題の、計31題の研究発表が行われました。参加者の総数は107名で、その内訳は、日本国内から95名、国外から12名でした。このように多くの研究者および学生を一同に会して開催できたことは、持続的に交流を行ってきた成果と、貴財団の助成を得て多くの来訪者を招聘できたことに依るところが大きいものと考えます。開催の主体である日本と台湾以外からも、中国・米国・香港・モンゴル・ベトナム・ブルガリア・ケニア・ルワンダといった多彩な国籍の研究者や学生が参加しました。

本シンポジウムは「分子細胞生物学」という比較的大きな枠組みで行っていることもあり、生命科学のさまざまな分野の研究者および学生が参加しました。そのため発表内容も、分子レベルの構造や動態解析から、脳科学・免疫応答・癌制御・新規薬剤や診断法の探求など、多岐に渡るものでした。このように基礎研究から応用・臨床に至るまでの多様な専門興味を持つ研究者が一堂に会する機会は大変貴重であり、分野横断的な議論が盛んに行われたことは特筆すべきことでした。中でも、招待講演においては、国立台湾大学のMin-Yi Chou博士による魚類を用いたオキシトシンによる神経機構制御メカニズムの研究や、筑波大学の川口敦史博士のインフルエンザ感染がミトコンドリアの機能低下を介して心筋炎を引き起こすメカニズムの研究など、優れた研究が報告されました。学生による一般口頭発表においても、染色体に形成される特定の構造体からのシグナルが腎不全に至る経路に着目した研究や、インフルエンザウイルスのゲノム構造の構築過程を高速原子間力顕微鏡で解析した研究、酵母を用いてRNA結合タンパク質を介して細胞周期が制御されるメカニズムの解明に取り組んだものなど、斬新な切り口からなる興味深い研究が数多くみられました。ほぼ全ての口頭発表において、発表後には3-6人程度の活発な質問が続き、質問を短くしてもらったり打ち切らざるを得ない場面もあるほどでした。ポスター発表においては、奇数・偶数に分けて十分な発表時間を確保したことで、発表者と教員・学生の間非常に盛んな議論が

見られました。特に、これまでの三大学間の交流イベントに参加した経験のある教員・学生が先導して異なる大学間でも非常に密なコミュニケーションがとられ、どのポスターにおいても発表者が休む時間がないほど活発な議論が行われていたことが印象的でした。発表者には修士課程の学生も多く見られ、英語での発表経験の少なさから思うような議論ができずに戸惑ってしまうような場面も見られましたが、親しい教員や参加者からのフォローを得てやり方を学んでいく様子もあり、本シンポジウムがその狙い通り教育の場としてもよい機会を提供できたものと感じられました。

本シンポジウム後に行われたレセプションパーティーでは、リラックスした雰囲気でも更なる人的・学術的交流を深めるとともに、口頭・ポスターの発表賞が表彰されました。発表の評価は、参加している複数の教員による評価の合計で行われました。優れた発表が多く僅差での競争となりましたが、修士の学生であっても研究の面白みがしっかりと説明できてかつ論理的な組み立てができていた発表が多数あり、その中から受賞者も出たのが印象的でした。また、過去の三大学間シンポジウムに参加していた学生でこれまで受賞していなかったものが、今回初めて受賞することとなったケースもあり、このような交流事業を継続して行っていることの意義が感じられました。今後もこのような取り組みを継続して行っていくことで、本学学生の人的・学術的国際交流の機会を提供すると共に、生命科学系の発展に貢献したいと考えています。

今回のシンポジウム開催は、コロナウイルス感染症による交流活動の中断から 5 年を経て久々に京都にて実施されたもので、運営的にも不透明な面もある中、貴財団からの助成をいただいたことで企画調整が非常にスムーズに進めることができました。いただいた助成は、会場費・会場設営費・印刷製本費・消耗品費・その他交流学習会費の各種用途に使わせていただきました。貴財団からの多大なご支援に、深く感謝申し上げます。



参加者集合写真